

その象はとても素敵なハイヒールをはいて地下鉄に乗っていた。左手にはしっかりと切符を握りしめ、右手にはベストセラー小説を二冊も抱えていた。象がベストセラー小説を読むなんてそれまで知らなかったから、僕はとても驚いたものだった。

でもとにかくそれはラツシュ・アワーだったから、乗客はみんな象の存在を迷惑に感じていた。とくに象にハイヒールのかかどで踏みつけられたりしたら、もうたまったものじゃない。おうおう、なんて叫びながら床を転げまわるくらいではとても済まないのだ。だから象のまわりはドーナツみたいな形にぽっかりと空白になっていた。象の方もそれを意識してか、とても申しわけなさそうな顔をしていた。

たしかに象がハイヒールをはいてラツシュ・アワーの地下鉄に乗るといふのは、いくらなんでも非常識な話である。しかしそれでも、その象にはどことなく憎めないところがあった。だから僕は象にむかってちよつとにっこりと笑いかけたりもしたのだ。べつに象と寝てみたいと思つたわけではない。

象は僕が笑いかけたことでずいぶんホツとしたようだった。

「御茶ノ水はずつと先ですか？」と象は僕に訊ねた。

「えーと、四つ先ですわえ」と僕は答えた。

「あら、そう」と象は顔をぼつと赤らめた。「どうも、すみません」

「失礼ですけど」と僕は思い切つて象に訊ねてみた。「そのハイヒールはどこでお買いになつたんですか？」

象は一瞬啞然とした顔で僕を見た。「どうしてそんなことお訊きになるんですか？」

「いや、とても素敵なハイヒールだから妹に買ってやろうと思つて」もちろん僕には妹なんていない。

象は安心したように微笑んだ。きつとハイヒールのことで何か批難されると思つたのだろう。

「これでしたら、銀座のヨシノヤで売っておりますよ」

象は御茶ノ水の駅で地下鉄を降りた。降りる前にドアのところで立ちどまって僕に手を振つた。

象の姿が見えなくなると僕はあくびをひとつしてから本の続きを読んだ。象の世界では僕は結構人気があるのだ。